

變異學濟
著之教安丸

特246

764

生活苦の涯に來るもの

行發會同協險保本日



2

0021173-000

特246-764

経済学異変

丸安教之・著

日本保険協同会

昭和8

ADC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月2
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

特246
764



同、此古、権七、認識不足、
程、不幸、素因、なるもの
は先、あるまい、其内、十、七
保強、に對する、認識不足、程
自分、に取つ、て、其、間、に取、つ
て、不幸、な、事、は、ない、の、上、

著、者、

目次

生活苦の犠牲(其一)	一
生活苦の犠牲(其二)	一
胎された生活苦と不景氣	一
去らぬ生活苦	一
生活苦の落着(其一)	五一
生活苦の落着(其二)	五九



本會ノ信條

保險——この制度に寄生し雜生して居る現代の様々な誤解、中傷、虚偽、虚言、不倫、貧慾、驅引、破約、無責任等の不純分子を委く洗滌し去つて、眞に此の事業の理想に目醒めた時我々は思はず自分等の従事する仕事の本當に崇嚴な、而して遠大な文化的一大事業である事を痛切に感ぜられます。小さい弱い我々人間の力を以て「時ト所トヲ嫌ハズ糶生スル人生ノ不幸ニ對抗シ」我と我が家庭更に子孫の幸福迄も思い悩む尊い純眞な愛をして最も速く最も近くそして最も適切に實現し得る社會共存の一大原理、この原理の普及この信仰の宣傳のため日夜身を捧げて、あらゆる迫害と侮辱とを物ともせず、勇往邁進しつつある私達の前途には實に涙ぐましい程歡喜と希望とが満ち／＼して居ります。

日本保險協同會

生活苦の涯に來るもの

生活苦の犠牲 (其一)

○ 「何んと云つても、最つと景氣にならなければ」。到る所で、聞かされる言葉が是だ。而も其景氣が何處より來り何處へ往くか々に就いては、誰も彼もが黙してゐる。知つてゐるのか、知らないでゐるのか、其さへも解らない。「だから景氣が來ないんだ」

○ 景氣待望の爲には自分は少くとも、經濟觀念の本筋に立つて之を統一したいと云ふ、大外れた自惚で、だが自信を以て之を書いた。其だけに眞劍だつた。従つて、誰の手先にも、特に此人の々と云ふ提灯持にもなり得なかつた。唯、人間の或は民衆の立場を考へて、國民全體の手先には甘んじてなつた。云ひ換へれば國家意識と景氣即個人の幸福と景氣と云ふ信條だけは確かに在つたのだ。

だから、如何なる觀念に支配さるゝ時に、吾等は景氣に恵まれるかを、披歴したのだ。誰の爲めにしたのではないと云ふのは、人間乃至は、社會も生きてゐる間は、足の脂の踏み潰さるゝ痛さゝは、足の脂だけの苦しみで済まされないので、身體全體の苦痛になると云ふ眞意を味つてゐるからである。其は、全體の利益の幸福には、最と小さいものだつたにしても、唯一人の不幸も在つてはならないと云ふ事になるのだ。

故に國家の指導者が、其國民全體の爲め、最善の注意と努力を拂つてゐる様に、家長だつて、其責任の地位に居るものは、家族全體の爲めに最善の幸福を圖つてやる事を怠つて、社會の幸福も來るものでなく、財界の指導者だつて、最も微小なもの、財布に同情せず、景氣を策する愚かと同一である。

其意味に於て、此書は、小さきもの、爲めに書かれたのであり、又同時に、大きなもの、爲めにも書かれたのである。だから、讀書は次の例證も、小さい、平凡な、ありふれた例證だと云つて笑つてはいけない。反つて、此小さい悲劇が、ありふれた悲劇であればこそ、自分の生活へまぎれ

込む機会が多く、其に此小さい者の悲劇だつて、私のと云ふ言葉で語らるゝ時には、其時こそ其私に、限りなき悲に置き代へられるからだ。だから讀者は、小さい者の悲劇にだつて、矢張り自分の心に止め、て欲しいのだ。

笑を知らぬ、「姉妹が水底へ」

七日午前五時中、大阪西區江戸堀南通五丁目、江戸堀川筋西北橋上流の南岸に、赤い花緒のフェルト草履とキルク草履とをキチンと揃へた上へハンドメツクをのせてあり、その近くに熱田神宮、豊崎稻荷の入った守袋のあるを、護岸工夫が発見、ハンドメツクを開くと、黒革表紙の手帳に遺書めいたことが書きつらねてあつたので、川口署へ届け出た。

ハンドメツクの中には、女持腕時計一個、空の財布及前記の手帳が入つてゐるが、同手帳には繰返し繰返し「南無阿彌陀佛」と書き連ね

「お母様私達二人をお許し下さいませ。決してお母様一人を置いて私達二人が行くのではなかつたのです。なろうことならば、一家が楽しく暮して行けるやうにと、今迄どんなに苦しんだか知れません。けれども小さい時から一日として、笑つて暮した事のない私達一家なんです。此上私達が生きてゐたら、お母様に心配や苦勞をさせねばならないから、私達は此世を去る心になりました。」

正子・道子二人より

○ことごとく、樋の音立て、雀の子、何をすらすら行きつもとどりつ。

正子

○初夏の青き光線は、窓際に書を讀む人の指をも染むる。

正子

同署では薄倅の若い姉妹が、抱合心中をしたのではないかと、下流の木津川水上署へも通ずると共に川口署員と協力、死體捜査に努めてゐる。——と（昭和八年九月七日發行八日附大阪朝日夕刊）

「寂しいのよ」と江戸堀心中

既報、七日朝大阪西區江戸堀川に母親あての正子、道子とある遺書やハンド・メックなどを残し身投した姉妹は八日午後零時半同區川口町三六木津川橋下流西岸に腰ひもでかたく身をくくり合せて浮むだ。木津川水上署で檢視したが、年上の女の帯の中に、母親にあてた二通の遺書があり、其一つに「正子はとても寂しいのよこれ以上生きて行く元氣はありません」とあり、

所持品により岐阜縣太田町カフェとうちやん方の女給、愛知縣丹羽郡岩倉町五十嵐龜次郎氏方高田せきさんの長女正子さん（二）とその妹で、名古屋市東區倉人町藝妓置屋、近藤とめさん方抱藝妓道子さん（一六）と判明した。

姉妹二人で母親を養つてゐたが、美人の妹は病弱で勤めが苦しく、去る四日家出し姉を訪ね、六日朝大阪の女給にならうと來阪したものであると。（昭和八年九月八日大阪毎日新聞朝刊）

此記事に依ると、確かに父を失つた二人の若い女が死んでゐる。境遇が彼女達を殺したのだ。而も朝日新聞に載せられた遺書めいたもの、最後に書かれた辭世の歌？から察すると、自殺した此若い女達は、淡いにしても断ち難い此世への、其此世と云ふのが生くるに甲斐のない、笑ふことすら與へて呉れなかつた、味氣ないものだつたにしても、流石に二十年の生涯を終る最後へ今直面する悲しみと未練とが、滲々とにじみ出されてゐる。其程に「死」と云ふ事は、「悲しみの極み」なのだ。「陽の影を見る事の出来なかつた」、「此上生くるは悲し」い事だつたにしても、彼女達が死魔の手に委すまでには、矢張り云ひ知れぬ未練と、覺悟との間を、涙ながらに「行きつ戻りつ」した事も彼女の辭世の和歌で窺はれるではないか。其限りなき苦痛と、堪らなくも堪へてゐた生活の事共も、今更ながらに、偲ばれてならない。

だが新聞から眼を離して心残りの多い死を遂げた彼女達姉妹の爲めに冥想に沈む程に多感な者が此新聞の讀者のうちに何人居たであらう。諸行は無常だなどと思つてゐると、此娑婆が無氣味に揺いてゐるやうな氣持に心を取られるが其儘、尙凝つと耳を澄ましてゐると、何だか闇の底から、バタ！バタ!!、と慌しく、而も軽く、微かに、消へて行くらしい、彼女達姉妹の登音の氣配を胸の底へ感ずる。

此世と彼世と、幽明の境を越えてゐるとは云へ、言つて置きたかつた、して置きたかつた事共へ

の執着に氣を採むでゐる「靈」の嘆きではないのだろうか？

六

曲りながらも生活を樂しみ、幽かながらにも明るさを感じてゐる人達や、今にも「望」が訪づれて来るだらう事を頼りにしてゐる人達に取つては、斯くまでに虐げられた人達の在る事を知つた所で「自分達は未だ仕合せだ」と思ふに止めるだけで、悲劇の主とは縁が遠く、其上百里も距つた所に居て此話を聞いてゐるやうな氣持の人々には、他人のどんな悲劇よりも寧ろ「自分が蚊に刺さるゝ事」の方が、より重大な關心事であるかも知れぬ。

だが遠い所へならどんな大きな波紋だつて及ぶまいし、又投げられた石がどんなに小さいものだとにしても、靜かな水の上では、其がどんなに小さいにしても一輪の波紋は無くては濟まない。だから名もない一人の藝妓の死だつて、素性も氏も解らない一人の女給の死だつて、此娑婆に依つては其周囲の親類だとか友人てふ人達へ彼女達は、彼女達相當の影響を與へてゐるに異ひない。事に依つては又何處かで、釋迦の様な人や、ルーテルの様な人が居るとしたら、普通の人達では見逃し易い此水死事件でも、敏感な彼等に取つては「自分に對する神の啓示」にでも接した様に、翻然として發心する人が出ないとも云へぬ。そして其人達に依つて世界を震駭し感化せらるゝ、導火線にならぬとも限らない。其程でないにしても「昨日の淵が今日の淵となる」とか、今更ながら「今日は人身、明日は我身」てふ有爲轉變の世情に氣附いて、自分丈けの生活でも改むる人もないではない。

誰だつて幸福を願ふとしたら實際は其様あらねばならないのだが、而も其を悟る者が稀なのだから「悲劇」は何時になつても此世に堪へる事がない。其内に自分の上へも、巡つて来るのだ。

共に比べると流石に釋迦やルーテルは普通の人とは異つてゐた。釋迦は、名もない、貧弱な、薄汚ない一老人が、突如として、街上に水桶を擲いだ儘で「不意な死」を遂げたのを宮居の窓から目撃した事によつて、惜氣もなく榮辱を捨て、「南無阿彌陀佛」に歸依し、其生涯は衆生濟度に終始を貫き、ルーテルも、彼に取つては知らぬ男ではあつたが、偶然にも途上に於て「雷に打たるゝ」を見た時に、翻然として矜を正し、少時は感慨無量だつたが其の裡にも、「愚なる者よ！ 汝の生命今宵にも奪はるゝ事あるを知らざるか？」と云ふ警句を、深く／＼再認識をせしめられたからだつた。それから彼は終に決然として立ち、聖書を僧侶の手から奪つて、此を萬民に開放したのだつた。會て宗教改革を企てた幾人もの先輩は、皆火刑に處せられて事終つた其後を繼ぎ、彼も當然死を覺悟してルーテルは立つたのだ。彼はウォルムスの宗教討論會に於て聲を勵ませて曰く「此堂の屋根の瓦が悉く惡魔となつて迫るとも、自分は斷乎として戰ふのだ」と。彼を殺さむとする王侯貴族・僧侶の前に、彼をして斯く放言せしめた勇氣は、何處より來たのか？

釋迦にしても、ルーテルにしても、唯「一人の死」によつて、大轉向へ導かれたに過ぎなかつたのだつた。「死の警告」も、「天の啓示」も、知慮の深い人に依つて悟らるゝ時なら、其が一つだつても

七

無駄にならないで其響は限り無く大きい。此等一つ／＼の死は、實に世界の思想も信仰も、そして生活も、大轉向を爲さしむるに足るものだった。だから、どんな小さい事柄でも、其には「世を動かすに足る力と理由とを持つてゐる」のだ。唯其を人が「悟る」と「悟らざる」に過ぎないのである。而も釋迦の眼の前で仆れた老人も、ルーテルの胸を打つた若い男の雷死も、「笑はぬ姉妹の死」程に深刻な悲劇ではなかつたのだ。其に姉妹の死は文字通りに、海の藻屑に終つてゐるとは、そして其所に禍根が潜むでゐるのだが、だから吾等は、此二人の自殺から、何を學べば此悲劇が無駄にならないかを考へなければならぬ。そして是うした機會にこそ吾等の生活を再吟味する事を忘れてはいけない。

大正十四年六月から、昭和七年六月までの間に新聞紙上にて知られた「母子心中」丈けでさへ、實に千六百件餘の多きに及び、母親の道伴にされた頑是ない子等が、千八百餘名にも達してゐるのだ。而も世人は、彼等が爲めに「死魔」に弄れたかを、斯くまで多數な犠牲者を出すに至つても何故に反省しないのだらう。最早麻痺し終つた、無覺な呆然とした鈍い氣持で生きてゐる人達に墮在した世間になつて仕舞つたからだらうか？ 是うした無神經時代が長く續けば續く程「悲しき死」は限なく續出して、其跡を絶たないだらうに。

街を歩む誰、彼が「夕刊賣の鈴」や「辻占賣の哀願」に出會ふた時に、此小さい夕刊賣や辻占賣

の生活!! を思ふて「何が彼等を其様させる?」かを考へた事があるだらうか。

昭和八年九月六日の大阪毎日

五日午後三時すぎ大阪十三橋署へ市バス梅田車庫監督吉成安太郎氏(四三)が出頭し早稲本署長に「哀れなる母娘へ車庫従業員一同の同情金ですどうぞ渡して下さい」と八十圓を差し出した。——事情をきくと。

去月廿一日夜大阪東淀川區東雲町一四九島居恒夫氏(三二)が同家前の、三國街道で淨正橋發三國行バス運轉手河野英雄君(二六)に觸れ腦震盪を起し其れがもとで餘病を併發し同廿八日ついに死亡したが残された妻きいさん(三三)は二年前眼病を患ひ恒夫氏が薄給の中から養生に手をつくした甲斐もなく失明し恒夫氏も過勞のため健康を害しその日の暮しにも困るようになつたあげく長男光君(三三)は妹の千葉縣東葛飾郡市川町島居いせんさん(二六)に預け長女房代さん(五三)と共に一家は細い煙を立てゝゐたもので同夜も恒夫氏は夏の着物三枚を入質しようと家を出たところ奇禍に遇ひ残れる母娘は途方に暮れ毎日泣き暮してゐた悲話を見舞に行つた前記吉成監督が聞いて胸を打たれ同車庫従業員四百名に話したところ忽ちわれ／＼と集まつた同情金が八十圓になつたので「市當局からいづれ慰藉金が出るでせうがこれは別個のもの、従業員だけの同情の結晶です」と持参したものとわかり署長も感謝、早速同區十三方面委員淺尾孝毅氏と協議の上わが子に手を引かれて同五時同署へ出頭したきいさんに右の金を渡したが、きいさんは世の情けに見えぬ目をしばたゝいて泣き崩れ麗しい情景を描いた。

江戸堀の姉妹心中の悲劇の發端も、幼かつた時に、豫期しなかつた父の死^クが、彼女達の生活苦の序幕であり、巢立ちであつたに異いぬ。其からが、辻うら賣親子^クのやうな道を歩みつけて、終に、死を急ぐ姉妹になつたのであらう。一家の生活と其父の死^クは餘りにも多くの悲しみを憶はせて呉れてゐる。其^ク辻占賣母子の話^クと云ふのが是うである。

「保護法に泣く」辻うら賣親子

皆が食つて行けぬから……と警察へ除外例嘆願

大阪北區澤上江町七丁目衛生組合事務所前バラック内津雲きよさん(三八)は四年前に夫を失ひ九州から來阪し長女春代(八)長男正道(五)の二人を抱へ生活に困つた末辻うらを賣つて歩き一日八十錢くらゐの収入を親子三人生活してゐたが、こんどの兒童虐待防止法で子供を連れて賣歩くことを禁ぜられた、しかし子供が幼いので家に置くことも預けることも出來ず、やはり連れて歩かねばならぬ現狀にあるのでこれを許してほしいと六日朝網島署に泣きついて來た、なほ春代は七月まで豊崎第五小學校に在學してゐたが乞食の子だといぢめられるので退學してゐる。—大阪朝日新聞—

だが吾々の生活が、最と共同てふ精神に支配され、自己の責任と云ふ觀念にも、最と興味を持つなら是うした^ク生活悲劇^クや^ク清算死劇^クが、吾等の家庭にも、吾等の社會にも、なかつた筈であ

る。従つて此種の^ク貧乏^ク即ち稼ぐに追つく貧乏の原因が除かれてゐた事だらうものを。

生活苦の犠牲 (其二)

食はむが爲めに働いてゐるのか? 働く爲めに食ふのか? こんな疑問ほどの^ク言葉の浪費^クも其様多くはない、だから誰が聞いても有閑學者の机上遊戯にしか聞へない程だ。何となれば吾等の生活は嫌と云ふ程「食」に集中され過ぎて居る事が、餘りにも明瞭すぎるからだ。「パン」の爲めには、節も操も、カムライジュされてゐるのが常識の圓滿な人と感心される世の中だから、そして其常識も全く運を繋ぐ爲めだから驚くにも當らない是非ともないことだと理解される程に金の力パンの力は強い魅力を持つてゐる。だがピラミッドを築く爲めに使役されたエジプトの奴隸が、疑ひもなく「働く爲めに」食はされてゐた事は、新に十萬圓の富を加へたとしても其人の生活には寸毫の影響さへ與へられない程の金持の生活と比べて、「保證されてゐる生活」てふ點では同様、共に相等しいものがあると云ふとも過言ではない。だが百圓の金でも其を得ると得ないととつて、甚だしく其人の生活が變つて來る様な人達に取つては、彼等は正直な處「食ふ爲めに」働く^クと云ふ方が、理想としては正しくないにしても實際としては、眞面目な嘘らない告白であつて實、際彼等には常に心に

餘裕などを與へられてゐる様な生活を兼ねてゐる。唯餘儀なくも、食ふ爲めに考へ、食ふ爲めに怒り、食ふ爲めに笑ひ、食ふ爲めに働いてゐるのだ。

だが稀れにしても「貧すればとて」と云ふ一群の人達も時々には見出される。

月・雪・花などの自然美の享樂に満足して、食ふ以上の悅樂に酔ひたがる詩人達が、又其だから貧乏なのでもあらうが、其貧を苦にしないで寧ろ私かに富者を輕侮する人であつた。

「何のその百萬圓も笹の露」

貧乏人だからと云つても、酒に酔ふ氣持は長者と何等異りがないと云つて、長者を羨やまなかつた風情が残されてゐるから變つてゐる。彼等は又晴れた夜の夜空に星の光を眺め乍ら、誰も邪魔し得ない空のダイヤを、自分のものとして充分に之を享樂し、誰かゞ高價なダイヤを金庫の奥深く秘めて、不自由な觀賞しか樂しめない、愚かな満足を喘つて「實にソロモンの榮華の極みの時だにも、野の百合の花の一つだに如かさりき」と皮肉り、非常人のみが横にする事の出来る解脫心境の「神域の趣興」に獨り北叟笑むのが常であるが、而も他面に、世俗の慾から脱け切らない、常識詩人達は「酒なくて、何のをのれが櫻かな」

などと揶揄し、凡衆の眞生活を代辯して「花よりも團子」だと喝破してゐる。然し空の星も野の百合も、結局、現實の社會を支配する事が出来ないで、團子に勝てない揚句に、良心と妥協する人達や

平凡・非凡の衆に依つて教壇に體よく禁足せられ、祭壇に恭しく祭り込まれるに至つて其以外の娑婆ではパンの爲めには見榮も外聞もあらばこそ、なんでも御座れ主義へ復歸せざるを得ない程に、人間は欲望への飢が激しい。だから況んや常に生活に保證のない人達の焦慮は、單に總ての心事も行動も、唯食はむが爲めにつきてゐるのも無理がない。だから、我・食はむが爲めに何をなすべきや」は人間が智慧の樹の果實を食つて以來の問題であり、目的でもある。

其で食はむが爲めに！ 如何なる善事が行はれたらうか？ 又食はむが爲めに！！ 如何なる惡事が行はれたらうか？

兎に角、食はむが爲めには、昔から刃が研かれた事は疑へない。善い意味に於ても、悪い意味に於ても、人間の鬭争は食はむが爲めの努力である事を證明され、又其れを信じられてゐる限りは。支那甘肅省の或地方に於ては、最近數年間の凶作で、天にも地にも全く菜色なく、生氣もなく、人心も荒廢して秩序の失はれた果は、終に食はむが爲めに、彼は自分の妻を譲り、娘を渡してゐると云ふ慘事が傳へられてゐる。而も彼女達は人買の鑑定に依つて評價されるのである。例令糧を持つてこそ命であるとは云へ、娘は悲しくも僅々十四・五圓で引かれ、人妻はすーつと落ちて三・四圓で片附いて行く相であるが、十四・五圓で幾日の露命をつなぎ、三・四圓で幾杯の粥が吸らるゝ事だらう。其と引換へて賣れて去つた娘や妻の生涯に何時笑ひの日が來る事だらう？

其は非文明國支那のみに限つた話ではない。我北陸地方の或村では、食はむが爲めに、全村擧つて、妙齡の乙女を一人も残らず賣り、心ならねど夜の汚辱の犠牲として、彼女達の肌を埋めて仕舞つたと云ふ事實巷話が、未だに最近のニュースとして耳新らしく残つてゐる。

此程に人間は食はむが爲めには、如何なる事でも敢行する程に大膽なものだ。其爲め悪は管に殺人・強盜・人心賣買・人身供物等々に限られはしない程に。

而も弱き者は、自から生きむが爲めには、何を犠牲になし得るだらうか。唯々自己の生涯を葬つて陰獸の餌となる外に策がない。其様した例證なら、捨て場に困る程、日々の新聞にも報ぜられてゐる。其でなくとも、榮養不良相な浮かぬ顔で、来る日も来る夜も、殊に寒空を見上げて雨雲を氣にしながらも、新聞を抱へて停留所で思ひ出した様に鈴を鳴らせて、寒い夜にも鼻をすゝりながら立ちつくしてゐる少年少女も、氣の毒な標本である。

養ひ手を失つた婦女子や幼少年や老人に、「笑ひを知らぬ生活」が来るのは餘りにも當然である。噫!!其は自己の爲めに犠牲にする何物をも持たぬ弱者の行くべき唯一つの淋しき運命が其だからであるが而も、自分の子女が食はむが爲めに、如何程大膽となり得るだらう?

胎された生活苦と不景氣

徳川政權の末期に長く飢饉年が続いた。其時には皮肉にも小判を口に咬へたまゝで餓死した長者があつたと云ふ話である。而も今日の社會では、五穀が豊かに、豊年であり過ぎる爲めに、反つて餓へねばならぬ人達が増へると云ふ不思議な困つた時世になつた。そこで「豊年飢饉」と云ふ新しい言葉が、時代の特異性を表象して生れて來た。此不自然な言葉は、聞く丈けでも不自然な經濟異變に依る不景氣の波頭が、恐ろしい形相で、農村にも都會にも渦巻いてゐる態を明かに偲ばせて呉れる。悦び得ない豊年なんて、如何して信じらるゝのだ。

「米が安くなるからだ」

「其にしてもだ。多く取れたる量で償ひがつくのじやないか?」

「理窟は其様だが、安ければ米の買手がつきにくいから、米が有つても金に困るんだ」

「だが金を煮て食ふのじやなし、米が欲しい爲めの金に苦しむでゐる街の人も多いのだから、豊年は矢張り朗だらうに」

だから結局「貨幣經濟」苦、「借金」苦を離れて、今日の産業不振も失業苦も、理解が出来ないのである。依是觀是、之多年に亘る頑強な「不景氣退治」には(1)産業界の借金整理、(2)貨幣政策の確

立、(3)商人の利害觀念の是正、等々に負はねばならない事は自から明かであつて、景氣の浮沈は是等と共に相關して、堅く、互ひに強く結び付けられ、一脈相通じてゐる事は、特に注意しなければならぬ。だから貨幣政策を抜きにして借金の整理の眞髓は語られず、商人の利害觀念の是正に言及せずしては貨幣政策も其眞味が把めなくなるし、借金の整理の意見にしても商人の利害觀念の是正を忘れては問題にならない。

負債の生じた理由

先づ第一に、何故に我産業界に負債の重壓が、身動きのつかぬ迄にやつて來たかと云ふ事である。誰でもが知つてゐるやうに、産業上の負債は、其によつて企業を擴張又は強化し、以つて利益の増大を試みる爲めのものであるから、食ひ潰す爲めの借金と區別されて、多分に樂觀的な軽い氣持で扱はなければならぬ性質のものである故である。

従つて、元來から云へば、産業上の負債に苦しめらるゝ事などは、餘程不手際な當事者でなければ、他に何等か特異の事情が伏在してゐなければならぬ。

だから借金禍による今日の産業界苦難の歴史は特異の事情を生むだ未曾有の異常時たる大戦當時へさかのぼらねばならない。大戦景氣の華やかであつた時に、諸物價の騰貴に従つて、米の騰貴も目立つて來た。勢ひとして農民の懐は膨れざるを得ない。石四十圓になると、米騒動が勃發して、至る所に強訴が起つたが、其翌年には、米價に刺撃されて米の増産が企てられ遂に百萬石の増収と

なつたばかりに、俄然米價は半額に惨落したと云ふエピソードの外は、止む事なく騰貴して、消費者の心膽を寒からしめ、石六十圓にまでの記録を残したものだつた。

米の騰貴によつて懐の膨れた農民達は、今迄に欲しかつた生活娯樂品を、氣前よく彼等の生活に取り入れた。自然に彼等の生活は向上し、彼等が「麥飯を廢して白米に代へた」のも、此時からだ。數年の景氣は全く農民に和やかにして、大膽な、冒險をも輕んずる程の心強さを與へたから、彼等は生活を樂しむと共に、土地・田畑を争つて買つた。株式を買つた。米の價値は高い。借金が何んだ。是うした風で長年の保守主義は、事毎に退けられた。

だが米の價も萬年高値と云ふ譯には行かなかつた。

然し贅澤に慣れた生活は縮み難い。株式を買つたり、田畑を買つた爲めの借金は、眞冬に白耕を着てゐるやうに、底氣味悪く目立つて來た。

なるとなれば、米が下落した事によつて、借金の重味が倍加したからである。即ち借りた時の金は當時に米一俵で償へたものが、今日では米二俵でも償ひ兼ねるてふ事に氣付いた時には既に貨幣價値の變動による悲劇の幕が、閉ぢる機會を失つた態だつた。

大戦以後に下落したものは、米價丈けではない。機械産業界に於ても、戦後にも景氣餘炎に魅せられた、無自覺な消費者の懐中を富てにして、久しく物價の落調を支へて、甘い汁を吸つてゐた間

に、外國品に市場を奪はれて、大戦で稼いだ「虎の子」が故の古巢へ連られて歸つて仕舞つてゐるのに氣附いた頃には、最早何事も手後れであつた。茲にも農村と同じ様に急に貨幣が心細くなるまで國內市場から姿が消へて仕舞はなければならぬ状態になつてゐたのだ。

だから當然其後に來るものは、大衆の購買力の減退に定つてゐる。其次は商品の賣行か悪くなる。と云ふ順序になる。そこで物價が下落して呉れると問題でないが、物價が下らないとすると、貨幣が少くなつてゐるから、高いものを澤山買ひ切れないで、言葉を換へて云へば、賣れ残りが出でざるを得ない。此賣れ残りを眺めて「生産過剰」だと云ふ譯で、其を持ち堪へて居られないから、早く賣つて貨幣が欲しいとなると、此生産過剰が面倒になつて來る。

然し實際は、此「面倒」が表面化して來るまでは、或は來てゐるにしても、一工場の供給能力では、例へ共が三菱や三井程の大財閥だつたと云つても、其丈けでは國民の全需要を充し得ないのであるから、誰だつて國民を目標に一品でも多く賣り拂ふ目的が、生産競争となつて、期せずして嫌が應でも、生産は過剰にならざるを得ないから、お互ひに價格を下げ合つて、其が痛切にこたへて來ると、漸く製造を手控へなければならなくなる。仍で産業設備の一部又は全部が休止するにつれて、其資本が失業すると同時に働いてゐた丈けの人数も失業するのだ。

是うなると借金で買つた田畑から收穫がなくなつた様に、其が借金で備へた資本・機械だつたら、

其企業家は實に堪つたものでない。殊に其借金が外債だつたりすると、其苦痛は本當に云ひ難い悩みだ。故に對米爲替が下落する毎に蒼味を深めて行くだらう電力會社^①の重役達の不安相に並むだ「沈痛な顔」が思ひ出さるゝ。

其に農民の負債も悠に、四・五十億圓に達してゐると云ふのだから、商工業者にも劣らない借金苦に身を焦しつゝ、必死の悲鳴で救を求めてゐるばかりで、未だ救ひの手が伸びて行かないで居るのだ。盡せども盡せども、其が役立たないで失望のみが、残されてゐる。

當に、働けど働けど、わがくらしらしくならざり、じつと手を見るゝなのである。

舊來の經濟學でなくとも、企業家や農民の顔色で其時の景氣が占へる事は事實である。だが其企業家や地主達の「景氣色」を何處から求むれば好いか？と云ふ事には相當に議論の餘地がある問題である。

今日までの經濟學說に依ると「物價の騰貴率」は景氣のパロメータだと云ふ風に考へられて來たのだつた。其には(1)物價が昇ると、民衆は貨幣から物へてふ換物乘氣に刺戟されて、と云ふのは貨幣價值が下落すれば其丈けの差損が出来るから、其損害を少なふするてふ欲目から早く多く物を買ふ事になり、(2)其の爲めに需要を増し、(3)従つて生産規模は擴められ、(4)企業家は利潤を増し従業員^②の財布も膨れるから、(5)民衆の購買力が殖へて、(6)本格的な景氣が出ると云ふのが、其理由なの

である。だから従來の遣り口では、何んでも彼でも、不景氣退治には物價を騰貴させやうとする事に定つてゐたのだ。

借金と經
濟苦

而も經濟界を重壓する最も重なる原因の一として「借金苦」が餘りに目立つてゐる關係上、其を最も容易に、苦痛を少くして整理を行はす爲めには、景氣挽回策の濶踏みとして、兎に角物價を騰げねばならぬと云ふのが、財政當事者の意見であつた。だから従來の經濟的經驗を基礎として考へる事以外に出ない指導者達が、不況回復を願つて「物價の騰貴」を望むだのも、其心情に於ては、何等非難すべき筋合ひではない。だからインフレーション政策は、古風な經濟眼を以て見るときには、決して避ける可きものでなく、躊躇すべきものでもないのである。

故に衆論を以て、紙幣發行の保證準備としての國債を、四億圓から拾億圓まで擴大し得る事を可決し其信用の膨脹・紙幣發行も容易にして、貨幣の流通市場の活潑を期し、其次に來るべき「物價の騰貴」を待望したのであつた。其のみではなく、インフレーション政策の一端として、昭和六年政友會の犬養内閣の成立の當日に、金輸出再禁止の斷行も惶慌として發令したのであつた。

だが一つとして、即紙幣の發行を容易にした事だつて、金輸出の再禁止だつて、物價騰貴に役立つた妙藥にならずして、何時の間にか其さへ口にしなくなつて仕舞つた。それで嘆くとすれば「我笛吹けども汝等踊らず」てふ類であり、新發見だとすれば「舊い經濟學通の經驗が、今日の經濟事

態には何等の參考にもならない」てふ事に過ぎなかつたのであるが、其にも増して、財界當事者の失望の種になつたのは、阻み様のない物價の軟調・落勢であつた。そして此物價の落勢は、彼等借金苦界に呻吟してゐるものに取つては、其上に供給利益の採算點を侵害せらるゝ恐怖に加へての恐怖を、與へらるゝ恐れなのである。

「待つて呉れ。其は一體どうしてなんだ」

「物の價格が下つたら、何故餘計に借金苦が増えて來るつてかてふことだらう」?

「うん！ 其様なんだ」

「其はだ、物が下ると云ふことは、貨幣の値段が上がることで、其が段々昔に比べて開きが甚しくなることだ、段々貨幣が儲けにくふなると云ふんだ」

「ゑッ！ そりやどうしてなんだ」

「諸式が下ると賃金だつて下るだらう。だからさ」

「なにが」?

「家賃が貳拾圓から拾圓に下ると、自分の一日の賃金だつて貳圓が壹圓になつても結構同じ家に住へて、同じ物を食つて、貳圓の賃金の時と同じ風な暮しが出來ると云ふ事だよ」

「其でなら其で好いじやないか。……あッ！」

「其處だよ。家賃貳拾圓時代に、金貳拾圓也の借金をして、家賃が拾圓になつた時に済すとしても、家賃が拾圓になつたからと云つて、拾圓返せば済むと云ふ譯に行かないで、矢張り貳拾圓返さねばならないんだから、苦しいのだ」

「十日の儲け分を借りて、今度は二十日の儲け分を返さんけりやならぬのだからな」

「其様だ、其様だ」

「貨幣貳拾圓借りたのだから、貨幣貳拾圓返すと云ふのだから、兎に角其様なるんだ」

「人間が貨幣なんて、餘計なものを、造つたから、金縛りに合つてる譯だな」?

「?.....じゃ君は貨幣の話を知らないんだね」?

「まあ其様だ」

「じゃ話してやらうか! 順序だから」

「そりや有難い。是非一つ」

「じゃ初めるぜ。君の云ふ通りだ、.....」

お互ひに物と物と交換したり、自分で作つて自分で使ふと云ふ風だつたら、こんな問題は勿論起らない。だが人間の性質として、左様云ふ事が許されなかつたのだつた。人間が既に餘つたものをお互ひに交換し合つても、豊かな生活を愉快に暮そうとする欲望が、最早「貨幣へ導く素因」な

貨幣の出
來た理由

のだから、仕方がない。故に人間の文化が幼稚な時には、差し迫つた生活苦さへなければ、無採算的に「交換」もして済むだらうが、其内「多勢に熱心に、望まるゝもの」が出来て來たり「無闇に其を欲しがる人」に依つて「物」と「其」とが區別されて來ると、今迄の様に一切無頓着な交換では済まされなくなる。

例へば甲が麥を作つたとする。乙が家畜を持つてゐるとする。そして丙が果實を藏つてゐると假定して、甲は小羊が欲しいので乙に交渉すると、乙は麥は一寸も欲しくないが、果實となら是非小羊とでも換へたいと望むでゐたら、麥を持つた甲は果實を持つてゐる丙と相談して、小羊を持つてゐる乙の望むでゐる果實と麥とを先づ交換し、それから麥と交換した果實と「望しかつた、目的とした小羊」と茲に初めて交換する事が出来るのであるが、若し丙も甲の麥と交換する事を好まなかつたならば、甲は乙の持てる小羊を得る事が出来ない。其上に誰が何を欲しがつてゐるか? と云ふ事を知る事が困難な、朦朧な舊時代では不便で、急の間に合はない。手數のかゝる物々交換が煩はしくなる許りでなく、物々交換によつて生れる副作用としての「文化の交換」による文化の發達が捗らない。

のみならず、甲が幸ひに麥を欲しがつてゐる乙を見出しても、小羊と交換する具體的な交渉で一難が表はれて來る。例へば乙が求めてゐる麥の量は小羊一匹を渡す程に多量でなかつたならば、

折角見出した相手とも話が纏らなくなつて仕舞ふ。

其で (1) 何時だつて (2) 誰でもが欲しがる (3) 小さい價格にでも譯なく分け得らるゝものを、誰もが争つて用意したがる様に育てられて行くと、誰と物を交換し様としても、誰でもが「其」となら何時でも交換に應じて呉れると云ふものが、多年の経験中には何かを取り出して見出されて來るのは決して無理からぬ趨勢だと云ふのが當つてゐる。其が貨幣なのだ。

故に貨幣は普通の物品としての性質や價值以外に、交換の媒介をする機能、購買力を有するものであつて、若し「貨幣」が「黄金」だとするならば、此黄金が「購買力」以外に物品としての性質がある爲めに、不幸にして黄金が不足なのに皆が欲しがる時に、皆の需要を充し得ない場合に「黄金」は奪ひ合はるゝの結果、非常に高價なものになるのだ。之を貨幣としての立場からみれば「貨幣價值の増大」で「物價下落」を意味し、之を單なる物として商品としての黄金だとすれば「黄金の騰貴」だと云ひ得る。そして此場合に、黄金が貨幣でなかつたとすれば「黄金のみに對して貨幣價值は下落した」のであつて、一般の物品に對しては何の影響もなく、だから一般的に貨幣價值が下落したのではないと云ふ事は注意しなければならない。今日文化國が擧つて、黄金を貨幣としてゐるのであるが、貨幣は必ずしも黄金でなければならぬと云ふ事はない。だが現在では「黄金」以外に、黄金より適當なものが見付けられない爲めのみである。

勿論飢饉が久しく續いて、外から食料の配給がして貰へない場合には、一粒の米だつて黄金よりも尊い。黄金も食料品を求むるに役立つまいとなつて「生命への危惧」を前にしては、黄金も食料の前には無價値にならざるを得ない。其場合は、一石の米、鹽は巨萬の黄金とでも代へ難い「生命糧其物」であつて、是うした場合に出遇ふと、物と貨幣との本末が、否が應でも判明して來るのであるが、之が常時普通の場合であると、誰だつて物よりも貨幣に誘惑さるゝ事を咎める譯には行かない。而も人間の心掛けとしては、純朴な農家だつて、米は充分に人を養ふて尙餘りある様に耕してゐるのだから、收穫が豊かだと、人間の欲望として享樂へと進むて行く事も自然だろし、又人に依つては、其を何日かの日の爲めに、如何なる欲望をも充し得るてふ、生活線確保に備へる爲めに備へて置かうとするのも亦自然で、是等は二つながら其爲めには、(1) 腐る心配のない (2) 交換の媒介に役立つ品の「貨幣」を所望しなければならぬのであるから、人間は「先づ貨幣」主義に追はるゝ所から、殆んど例外もなく、貨幣を目的に血眼になつて、齟齬として氣忙しく働くのも無理がない様になつて來るのだ。

其後の貨幣尊重

始めに人間が貨幣を拵へた趣旨や原因は、物々交換では (1) 相互に都合よく好きなものを持ち合つてゐない場合や (2) 交換價值の過不足てふ面倒を調和する爲めには、如何しても貨幣が必要になつて來たのが「其一」で、だから何と云つても貨幣は「文化の産物」自然的な思ひ付きであつたの

であるが今日では途方もない非常な魅力になつて「文明の支配者」の座に、安全に落ち付いてゐる。故に景氣も不景氣も、貨幣が素であつて、人間の喜怒哀樂も司つてゐるのだ。

「貨幣の由來はお陰で解つたが、どうして其が不景氣の原因なんかになつたんだ」

「まあ！ 過ぎたるは尙及ばざるが如しつて云ひたい所だね。其れは」

「と云ふと、つまり如何なんだ？」

貨幣は便利である。キリストや釋迦の様な人を除いた外の殆んど全部は、皆貨幣を欲しがつてゐるのだから「其が原因だ」と一口に云へば其様だ。

實に貨幣の便利たるや宏大無邊で、人間が滿され得る限りの幸福が、其貨幣の裡に包まれてゐると云ふ「妖しい魅力」を持つてゐると云ふ「恐ろしい魔力」があるからである。

色と慾と云ふ二大難物も、意地と張りてふ厄介なものでも「山吹色」には勝てないと云ふ程に「貨幣の力」は徹底してゐるから堪らない。

故に今日の經濟組織では、商人が中間に介在して、生産者と消費者とを「貨幣に依つて連絡」せしめてゐるのだから、そして其で彼等商人は其勞力の代償として「利鞘」を望む餘り、消費者の顔色を見て「欲しがつてゐる代物」でなければ、商人は消費者へ取次ぐ用意として活潑に生産者から仕入れない。其に慾しいもの、缺ぐ事の出來ないものであつても、我勝ちに消費者が手に入れたが

つてゐるものでなかつたら、商人も無理をして餘分に仕入れる必要がないから、生産者との商談も急がない。——と云ふ事になつて、其商談の度毎に受渡しさるゝ貨幣なのだから、商談が捗らないと貨幣の働きも鈍つて來るが、此「鈍い貨幣の流通」を指して金廻りが悪い……不景氣だ——と云ふことになるんだ。

「成程ね。其様すると、貨幣は不景氣の主犯で、商人が共犯だと云ふと圖星なんだね？」

「まあ無理に云へば、其様も云へない事もないと云ふ、相當苦しい理論になるが、だからだと云つて、頭から一概に左様に抑へつけて仕舞ふと云ふ事も出來ないんだ」

「經濟機關としての、商人の價値つて云ふんだらう」

「其様だよ！ 商人だつて、唯無意義に莫然と出て來たのじやないからな」

「だが考へてみる！ 自分では何物をも生産？ 即ち普通通俗的に云はるゝ生産をだ、何一つもしないで、暮して行かうてんでは、何か無理が有るやうに思はれやしないかい？」

「而し生産だと云つても、物の形を變へたり、組合せたりする丈けで、別に實質的に殖やし得ない生産もあるから、其と似たり、寄つたりのものだらう。そんなら商人の始まりでも話そうか！」

人類の交通は、何時までも狭い部落や郷に限られてなどは濟まされなかつた。其進出する機會を

與へるのが戦争だ。其闘争の原因は、文化の低い種族では飢饉であつた。

自分の部落に食ふものが乏しくなると、他の部落へ掠奪に出懸ける。そして何方か一方が征服されるんだ。そして其捕獲物のなかに「異つた文明」が発見されると、其次には「文明の交換」が行はるゝに道が拓けて来る。何時の間にか、部落と部落との間を遠隔の地と地との間を、文化の交換に出懸ける男が現はれて来ると、自分の部落で出来た色々の物を、他の部落へ行って、其處の特産物との交換が盛んになつて来るのだが、仍で此等の人達に依つて、専門に交易が初められる様に進むで来る。初めは自分でも生産してゐたであろうが、其をやがて、交易専門となるに及むで、終に「生産せずして暮して行く」者が出来て来たのだ。此は疑ひもなく、交易する物の値段のなかに、自分や自分の家族の生活が出来る丈の物質を求め得るに足るの物や貨幣を餘分に見積つて、受け取り得る様な価格で交易しなければならなくなる。口錢に依つて生活を立てる階級が出来て来たのだ。其が商人だ。

商人と貨幣

この商人は、自分の部落では生産過剰になつて其物に對する欲望が沈滞して仕舞ひ其を望む者が無くなつて、仕末に困つてゐる程のものを、他の土地へ其を運むで、其處で其處の人の欲望をそゝり立て、相當な価格で、買値よりも高く賣つて、其差を自分の利得とするのであるが、人間の生活が段々に賑やかになると、其様した原理が總願目となつて利益第一にもなつて来る。誰も彼もが

其「魅力」に化かされて仕舞つたのである。そして現在の商業も工業も、如何なる業も、自分の生活を全面的に支へて呉れる「貨幣を得る」事より外に目的がない様になつたのだ。

「だから商人を不景氣の共犯だと云ふのは少し酷だよ」

人生と貨幣は、今日に至つては、不可分の状態になつて、今更貨幣の購買力が變動して、勤怠によらない原因で、生活が不安になり、生活苦に脅やかさるゝ原因になると云つても、俄に之を排する事が出来ない様に、商人の存在も俄に之を否定は出来ないのである。而も最近過去十年間に起つた、貨幣價値の變動、即ち貨幣價値の騰貴が二倍に及むだと云ふ事は、産業の活潑を抑壓するに充分な、原因となつてゐるが、之だつて商人の罪ではないに於ておや。だから、舊い經濟的經驗のみに頼らふとする人達のみの間でなくとも、今日の組濟的不安は、結局、企業家の倍加された借金苦を如何に整理すべきかに歸してゐるが、其以外にも、其から企業採算を過少にする物價下落の爲めである、とのみ考へてゐる事は、生産者や商人としては無理もなく罪でもないにしても、此誤謬が明かに景氣挽回策を誤らせてゐる。何となればかゝる信念の下に、經濟的復興を企圖すると云ふ事は、勢ひ「物價吊上策」より外には、何等術ありとは思へないと信ぜしめたからである。

貨幣と繁榮

貨幣數量説によると、貨幣の数が多くなる程物價が騰貴すると云はれてゐる。會てロシアにソビエト政権が樹立された時に、ソビエト政府は、富豪撲滅の一策として、輪轉印刷機で無制限に

紙幣を造つて、其を市民に押し付け、豫期通りに貨幣は無制限に下落して、其貨幣の紙代にも當らなくなつて仕舞つたのであるが、之は貨幣數量説を如實に裏書したものであつたが、此物價吊上の政策は成功したが、其によつてロシアを繁榮に導く原因にならなかつたのみならず、反つて皮肉にもロシアの産業を破壊した直接原因になつてゐる。此と同じ系統の手段に依つて、我國も紙幣發行を緩和して、證券に依る保證準備を十億まで擴張し、紙幣の發行を樂にしたのであるが、「財界の要求」に基いて發行する我國の現象では「強制的に流通」せしめたロシアの様に、物價騰貴に利目がなかつたのみならず、是うした方法で發行された紙幣は、出た事は出たけれども誰も使ひ手がないと云ふので、又候幾何もなくして、日本銀行の窓口へ戻つて來たのである。仍で又「物價の吊上策」さへ完全に失敗に終つたのだつた。

物價吊上策の不首尾は、以前にも云つて置いた様に、ロシアの場合の様に、強制的に流通せしめないで、「需要者の御意のままに」だつたら、其効果は、酸性反應がリトマス試験紙に表はれて來るやうな譯には行かない。だが正直な處、ドイツの經濟的今度の經驗から見ても、彼マークの下落物價の騰貴・暴騰・未曾有の騰貴の時にだつて、ロシアの場合と同じ様に一體ドイツには、どれ程の經濟的繁榮があつて、どれ程に國民が自分達の生活を豊富を樂しむ事が出來たのか？だから物價騰貴策が、現在の企業的借金苦の離脱即効藥だとは受取り得るが、延いては其が不景氣退治の第一策

だとする事には、再考を必要としなくても好いのだらうか？ 其に何故に物價騰貴策が、加茂川の水の様に思ふ様にならず何故に笛吹けど踊られないかを考へねばならない。例へであるが、蠟燭の焰は太陽が沈むで仕舞つてからでない、勢ひよく煌々と燃へない様に、總ての燃焼は、陽の光のなかでは、大抵の場合は、夜程に充分でない。其丈けに白晝には甚しく燃焼が妨げられてゐるのであるから太陽の光のなかには、兎に角、燃へるものを抑壓する力があると云ふ事を、私は幼い時から氣附いてゐたのだ。

文明と物價

産業が發達すると云ふ事は、誰も彼もが、例外なく、より多くの貨幣を得むが爲めの努力の結果で、果樹の下までへは、自然に道が出来る様に、人間に「慾」のある間は、商工業の繁榮は自然の成行で不思議ではないが、唯、物價は文明と双生兒の關係になると云ふ點に氣附いて欲しいのである。昔の様に遇然に依つて、而も其が度々人目にはついてゐたのであろうが、會々注意深く目に止めて、普通なら見逃さるゝ事物であらう事を、見逃さなかつた事によつて、發明や發見の端緒を得、其様した段階に依つて進められた遅々たる文物の發達に頼つてゐた時でさへ、四千年以前の支那の開化にしても、ギリシヤやローマの文明にしても、更らに遡つたアツシリヤ又はエチプトの繁榮だつて、實に刮目に値するものが多々在つた。ローマ數千年前の文化の遺物たる、有名なコルシウムの建築が、數千年間の風雪雨露を凌いで二十世紀の今日に見へ、尙幾千年に堪へ得るかを偲ば

しむる程の建築に至つては眞に前代人の誇を爲し遂げたものといつても好い。其建築材料の正體に至つても科學文明の華を誇る現代人にも解き得ぬ謎であり、驚異とせられてゐるのだ。其と比肩するに足る、驚異に値する點に於てはコルシユウムに勝るとも劣らざるものとしてエヂプト文化の遺跡ピラミットの存在が在る。其に依つても限りなき古代人の偉大を物語つてゐる。

曾てコンコルドの哲人ニマーソンは、彼の哲學書の卷頭に於て「實にプラトンは哲學である。哲學は即ちプラトトである」と喝破した。其程に過去には巨人があり、エマーソンでなくとも「今日吾々が新しき意匠を發案したと云つて宇頂天になつてゐるのだつて、そんな意匠なんて、ピラミットの裡にだつて前からちやんと刻まれてゐるのだ」と現代人を皮肉つた現代人があつた。

是うした巨人群の眼、耳、口を通して、最も小さい世界の出來事だつて見逃されなかつた事が、現代人に取つての「偶然」が、彼等が餘りに注意深かつた事に依つて、「偶然とするには餘りに偶然が多かつた」であらう結果かも知れない、だから吾人の思ふ程に、文明の脚の進みも遅々たるものではなかつたかも知れぬ。

だが其にも勝つた注意と、可成りに血眼になつた研究的な、確信を持つた想像的な、創造に似た文明の發達經過を持つ、即ち實驗室の忙しい現代の科學文明の進む勢を以てすれば、其に結ばれて現はれて來る文物は、啻に驚異と云ふよりは、寧ろ怪奇異變に近いものになるだろう。

然るに「慾」てふ母を持つ「文化」と「物價」と云ふ双生兒は是れも「相互に排斥し合ふ・矛盾に満ちた・對立物」である事を明かにしてゐる。此相互に相反する二要素其はやがては自身の廢滅となる素因だとか、新陳代謝の原因だと云ふ意味のものでなしに、——勿論其が「文物」に働きかける時には其文物を改廢せしむると云ふ事とは別ではあるが、——一つの運動のなかに起る「遠心力と求心力」とか、一つの目的を遂行せしむるに必要な共同工作たる「統制と個別」と云ふ雌性と雄性との相互的關係にも等しい意味のものであるが、兎に角其様した相互に相反して均衡作用をなす性質のものが宿つてゐる。故に此の性質に影響され、關與される物價の動向の如きは、其慾に基いた騰勢は甚しく文化の制肘を受けて抑壓せられ「慾」の表現たる産業の、企業家的目的も利益も、大衆の利益と對立的なものでありながら、大衆の利益を無視して企業家偏重の利益觀念に依つて支配せむとする慾では企業家自身の目的も達せられないでふ、不離不即の關係に繋つてゐる事を意識するならば、物價の騰貴だつて、民衆が其騰貴を承認したと云ふ意思表示たる「購買」に依つて支へられなければ、空へ投げられた球の様、長く中空に止つてゐる譯に行かない。

「一寸待つて呉れ！ 發明は偶然かね？」

「何んだ今頃藪から棒に」

「發明が偶然からだと云ふからだ」

「だか本當だから仕方がないよ。例へば火を人間が使ふやうになつたのは、槍などの枝が、夜嵐で擦れ合つて出る自然發火から氣付いた事だし、硝子などの發明も、砂の上で焚いた焚火の下に遇然に出來たキラ／＼光つたものが、硝子の發明であり、發明だつたのだ」

「うーむ、そんなものかな？」

「其にしても、近代文化の寵兒たる電氣などは、フランクリンが雷の鳴る雨の日に大風を上げて會得したのだが、之は確かにフランクリンは、想像に確信を以て其結果を豫想してやつた發明であり發見でもあつたのだ。經驗もなく、見ぬ前から地は球いと信じて航海したコロンブスの仕業やワットが蒸汽機關車を發明した事と同様なんだ」

「うむ」

「どうだ創造的だろう」

「いやよく解つた」

「其では本筋へ行くぞ」

故に今日では、物價は四圍の情況の如何にかゝわらず、騰貴する事が出來ないんだ。否！自然の物價大勢は、寧ろ落潮に導く事に味方してゐるんだ。購買力の實質を「黄金」に求めてゐる間は、此大勢は續くのも亦自然であらう。

「じやいくら、物價吊上策を講じても駄目なんだね」

(1) 日 電 \$ 8,100,000 = 對百弗 ¥ 276 大 同 \$ 20,160,000
東 邦 \$ 12,375,000 = 對百弗 ¥ 305 東 電 \$ 71,128,000 對百弗六分利 ¥ 246 六分五厘 ¥ 252
年 迄 \$ 14,190,000 = 對百弗七分利 ¥ 287 六分五厘利 ¥ 280

(2) 本邦金輪再禁後の卸賣物價指數 (エコンミスト調査)

昭和六年九月我金輪再禁直前を一〇〇とす

昭 和 年	九 月	十 月	十 一 月	十 二 月	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	七 月	八 月
日 本	一〇〇	九九	九八	一〇〇	一〇六	一〇五	一〇四	一〇一	九九	九六	九七	一〇二
英 國	一〇〇	一〇一	一〇一	一〇一	一〇一	一〇〇	一〇〇	九九	九五	九五	九〇	九五

去らぬ生活苦?!

物價は企業家の支配に屬さず

産業負債の整理を容易にする爲めには、物價の騰貴が必要だ位は、誰にだつて解つてゐる。其に物價を騰貴せしむるには、インフレ政策を取らねばならぬ事も當然である。だから財務指導者達は、一生懸命に、インフレ政策で汗だくの大童の體であることも、其が舊い經濟的經驗から割り出

されてゐると云ふことを知る者には、一應は尤もだと肯首けるのであるが、一方インフレーションの對照的となる、(1) 民衆の購買力の現勢を正解してゐない事 (2) 物文々化が物價へ及ぼす影響を無視されてゐると云ふ事は、昔のやうな物價指導者の實力が失はれてゐる事に氣附いてゐる人達に取つては其政策が、今日では無駄で役に立たないばかりではなく、下手な手術や誤つた投薬程に危まれてゐる事も亦事實である。何となれば、最早フランスのなか味は「購買力たる大衆經濟」でなく、寧ろ「供給者たる、企業家經濟」に入れ換つてゐると云ふ事に氣がつかない結果からの「錯誤」政策だつた事に氣が付かなくてはならないからである。

換言すれば、何故に物價が、企業家の意思通りにならないかと云へば (1) 企業家が消費者より以上に貨幣が欲しい爲めに商品を供給し、消費者は供給者を自由に選擇すると云ふ理由が其であつて、これが爲めに貨幣價值の騰貴原因になつても、下落する原因には斷じてならない事である。其に (2) 民衆の生活は、昔の様に生活必需品のみの生活でない事から、買はないでも濟む所謂享樂品が多くなつて來た關係上、其大部分は「買はずに濟ませる」が故に、高い物價に嫌が應でも追従して行く必要がなくなつたからだ。つまり企業家が消費者によつて經濟的動向を決定する支配的な主權を制御されて來たと云ふ事に落ちて來る。

だから、産業負債苦に關係のない民衆は、物價騰貴を願はないのみならず、實際少ない貨幣で物

を買ふのだから、物價の下落も自然であり、大勢でもあり得る。

故に、高物價禮讚の笛を誰が吹かふとも民心は共に傾かないし、踊りもしない。自由主義に依る、凡ゆる物價吊上努力も効果がないとすれば、企業家達は、脊に腹が代へられない苦惱から、強制的な民衆の意志や購買力を無視した物價吊上策を取るとして彼の舊い經濟的經驗を基礎としての良策を偲ぶならば、平價切下げ氣迷ひが濃厚になりつゝあるのも道理なのだ。

平價とは
何ぞや

而も問題は此平價切下げも、持して成功するだらうかと云ふのである。仍で平價の意義であるが平價には「實質平價」と「購買力平價」との二種類に分たれるのである。此實質平價と云ふのは、日本の圓價に就いて云へば、五圓金貨のなかの「純金一匁」を指し、購買力平價とは此純金一匁が持つ「購買力五圓」が其である。故に吾等は、常に實質平價たる純金一匁を切り下げて、五圓の裡に純金八分に減じたとして、必ずしも購買力平價が下つて、購買力五圓が傷けらるゝとは限らない。即ち貨幣價值と云ふのは他の物品と異なるもので、常に其持てる純金の量目以外に購買力と云ふ特殊の能力が備つてゐると云ふ事を見逃してはならない。と云ふのは、五圓金貨の裡に含まるゝ實質の金量目が少くなつたにしても、其純金の價格が騰つて居れば、其貨幣の持つ「購買力平價」は必ずしも本來の價格以下に割られる事に定つてゐない。碎いて云へば、純金一匁五圓也として金貨五圓は、純金一匁の量目を有してゐるのであるが、純金が二倍に騰貴した時には、純金一匁を含む貨幣

は、依然として純金一匁を保つて、實質平價が傷付けられなかつたならば購買力は當に購買力平價の二倍に達する譯で、此際實質平價を半分に切り下げて、金五圓の貨幣に純金五分を含ます事に依つて、初めて以前の購買力平價、五圓の購買力に貨幣價值を引き戻す事が出来るのであるから、此際、實質平價を二割位切り下げたとて、購買力は依然として購買力平價以上に保たれてゐるから、所謂平價を切り下げても尙貨幣價值は下らないのみならず、より以上に高いと云ひ得るのである。だから如何なる場合にも所謂平價を切り下げたとて、貨幣價值が下るのでなくて、寧ろ騰貴した貨幣價值の水平運動として行はるゝものであると云ふ考へ方が正しい。

故に平價を切り下げ得る理由は恐怖相場が永續して、不當に物價が下つた場合に單に正常な物價を維持する爲めにのみ残された、最後の手段たる點を忘れてはならない事である。換言すれば物價が平價切下げに依つて其影響を期待さるゝ場合は、不純な原因や恐怖に依つて起り得る物價運動なるものが、自然的な下向運動でなくて、落勢を辿るであろう現象が避けられない關係上、物價が不當に急落して、供給者の採算點を割り、企業危機を孕む時に於てのみ實行可能な政策である事は申すまでもない。而も其を是認した處で、實力を削られた、安い貨幣を高で多く貰ふと云ふ、子供だましの様な感を深ふせざるを得ない。従て單に物價の至極緩慢なる下向運動が、文化の向上と共に、自然的に供給者の採算可能の範圍内に於て行はれ、其爲めに反つて企業が繁榮に導かれつゝあ

虎視耽々
たる外國
品

る時には、決して嘘にも平價切下げ政策は容認さるべき性質を持つてゐない。

吾々は過去に於て供給者が生産高を高く供給した結果、其間に乗ぜられた外國品に大衆の購買力を奪はれた爲めに今日に至つて如何に大衆の消費を害ひ従つて其報ひが、供給者に廻つて來た事に依つて、今日の生業不振が齎らされたのであつて、其原因を質せば、大衆の購買力疲弊に従つて如何に今日國民全體が供給者も消費者も苦しめられてゐるかを回顧する必要がある。而も其反面に於て、其原因は少時らく問はないが、極く最近になつて兎に角「安い日本品」として、世界市場にやうやく其存在が目立つて來たのであるが、其爲めに此「安い日本品」は國際市場を震駭して、更らにだに産業不振と失業續出に悩む諸外國を戦かせてゐる。従つて我國には其丈けに産業は擴張充實せられ、企業利潤の増加と本格的な失業の減少が傳へられてゐる事は喜ばしい。即ち日本綿布が機業本家のランカシアを侵して彼地の紡績女工にさへ纏はれ、日本電球が本元のアメリカに殺到して目を刺かせ、日本の鉛筆が其宗家たるババリア鉛筆を其地元で追ひ拂ふのみならず、ナイフにしるフオークにしる、日本より西洋諸國に盛んに輸出さるゝと云ふ奇現象からみると、全く「景氣は物價のまづ下落から」を充分に裏書してゐると云つて好い。

現在アメリカ大統領ルーズヴェルト及現英首相マクドナルドが、日本製ゴム靴の價格に小首を傾け、ついに戦慄して問題視するに至らしむる程に「安價」であつてこそ、初めて「ゴム靴工業」の

繁榮と共に其に關係する者の富裕があり得るのではないか？

だが世界は、獨り榮へて行く日本の産業が、自國の産業を犠牲にされる事に依つて可能である事に氣附いても、其を坐視する程に馬鹿でない證據に、諸國は世界經濟會議の名に於て關稅會議を企てたのであるが、其會議の前途に見切を付けて、會議半途から、各國は、地理的に、經濟的に、政治的な關係に依つて早くも「經濟ブロック」の設立に手を染め、大規模なる自給自足主義に塞ち籠つて、自己の繩張を他國に侵されぬことに専念し初めてから、其手初めとして差別的な關稅政策を取り、露骨に云へば「日本品入るべからず」主義を標榜した事は、破壊されて行く自國の産業を蒼慌として保護再建する事を主要な目的とする爲めには、到底避け得ない努力をしたと云ふに過ぎないのである。

所が關稅が高くなつて、其丈け物價が高くなる事に依つて、其賣行に支障を來さむ事を恐るゝものは一體誰だ。其と同じ人間が、關稅は自分の収益にはならないが、直接に自己の収益になると考へ直すと「其賣行に支障を來さむ事を恐るゝ事を忘るゝ」程に、頭が悪くなつて來るのは、一體何の加減なのだろうか？ 實に先づ賣れてこそ利益もあるものゝをや。

今日の急務として物價吊上を策する理由は、特に企業家の利益と支配觀念の政策を支持すると云ふ意味なもので、國民の全部であらう、消費者大衆の購買力の損傷が、物價騰貴によつて、大衆の

收入増加に先んじるならば、其を不利だと考へる大衆の支持が期待されないのであるが、其は國民大衆の参加や支持を無視しても景氣が來ると考へてゐるものの自負で、今時には通用しなくなつてゐる事に氣附ない所謂時代錯誤からであるが、萬一にも、假にも其が成功すると、疑ひもなく企業家乃至は農村地主が借金苦よりの解脱になる事は明瞭であるが、多くの支持者・讀者を有する雜誌乃至は新聞は、其支持者が多ければ多い程特殊なもの代辨者であると云ふ色彩や嗅味を弱はめて行かなければ若しも何かの機關紙又は機關誌であると云ふ嗅味を強くすればする程、其同臭味の讀者以外の支持を失はねばならないことを覺悟しなければならぬと異なる様に(1)文明の人類の幸福を約束すると云ふので、寢食を忘れて勵むだ、發明、發見又は改良等々が國民の努力に依つて進められた、文化なのであるから此、國民の利益を犠牲にして後に企業家が其利益を襲斷し得る物價騰貴の強行に到つても國民は何も與へられない、(2)前にも云つてゐる通りに物價騰貴が民衆の購買力の増加に先んじてなざるゝ事に依て起るであろう消費者の苦痛と相待つて、其實現の不可能性が潜むでゐる事も亦確かだ。

故に企業家又は農村地主が、自分達の不明又は非才の結果として蒙つた、事業上の金錢的損害を一般の大衆に轉嫁せしめる様な考へではないにしても、單に借金補填と企業採算のゆとりを増す事以外に理由なくして物價騰貴を望むでゐるのであるなら、國民の支持は勿論振りむきもしないだら

うから、益々其を試みるものの不明と無力とを國民に悟らすのが關の山だと、其様に推察されても仕方がない。

物價騰貴
を可能な
条件とし
る

而も企業家は過去に於ける人間の生活内容と、今日の社會に住む人間の生活内容とを、熱心に比較し研究してゐるのだろうか？ 彼等の吹く笛の音につれて、譯もなく踏つてゐた時代は企業家が(1)國民に次から次へと購買餘力を與へてゐた好況時代か、(2)若しくは生活程度が低く幼稚で、最低生活か其に近い類の生活を営むでゐる時で、前者の場合は「値に頓着なく買ふ氣分と購買餘力」に刺戟され、後者の場合は、何程騰つても皆生活必需品なのだから「買はないでは暮せない」と云ふのでいづれの場合にも、買つたには違ひない。其に比較すると現代は、(1)國民の所得は減つて一個のものでも、價值と價格とを十分に吟味して後に買ふ程に國民に「購買餘力も、氣前もない」事と、(2)我々の生活程度は、生活必需品以上に生活享樂乃至は贅澤を充分に取り入れてゐる關係上「買はなくとも暮せる」と云ふ風に變遷してゐるので、買はないのだ。

是う云ふ風に言へば、買はないと云つても必需品は買ふだろうと云ふ横槍が入りそうであるが、今日の産業は、生活必需品の生産が生活享樂品に比較して尠なければ尠い程即ち生産總額の大部分が、享樂財化するか、享樂費用として見出さるゝ所から、其價格が高い故に其等を買はなかつたにしても、「生活が出来ないのではない」から、買はない事にするので。此買はない事が全産業の幾%

かに達すると、其%が多ければ多い程必需品産業も其等が原因となつた經濟不振から生活必需品だつて十分に壓迫され、又諸物品に追従して騰げる事が出来なくなる。云ひ換へると、自然的に「騰り得ない」と判する方が正しい。

従つて企業家が、自己の利益を計る手段として民衆を贅澤にした事は好いが、其に依つて生じた思はぬ副作用として企業家の笛が役立たなくなり「自縛自縛」に陥入つて市場を支配する實力を失ひ、餘程影の薄いものに墮在して仕舞つてゐる。故に人よりも資本が重んぜられてゐた資本主義時代や企業家が大眾に先んじての文明歸依者であつただけの理由で産業を支配した時代には、彼等よりも晩くでないと文明を解し、利用もし得なかつた消費大眾は、フラスコの中の水の様に、資本家や企業家が自由に調節する火加減で、温くもなり熱くもなり、従つて其熱度に依つて起す水の環狀運動の緩急も、彼等資本家・企業家の思ふままだつたのであるが、今日一般消費大眾の聰明が、フラスコの水たる事を欲しないで、海の水であり、大洋の波でなければ、昔在つたフラスコの中へ、産業家と交代して、産業の隆替・盛衰の支配的實力を取上げて仕舞つてゐる事を裏書されてゐるやうな昨今の財界異變を見るにつけても何事か、反省しなければならぬ桐一葉の落つる風情を偲ばせて呉れるではないか？

其は曾て物價の落潮を阻止すべく、早晚行はるゝであらうとの期待から投機思惑をした弗買財閥

を救ふべく、何を措いても行つた犬養内閣成立日の發令たる金輸出再禁止も、其財閥救済に役立つたのみで物價騰貴てふ當然來るべき現象は前述した通りに、始めから姿も見せないで、矢張り物價は一途に落調を追ふてゐる。^②

此物價の落潮こそは今日各國が大童で、日本物質の大海嘯に襲はれて危胎に瀕しつゝある自國産業の保護と其復活を願ふの餘りに課しつゝある、禁止的高關稅な大障壁をも乗り越へ、目覺しく外國市場への進出を可能ならしめてゐる條件の一つである事を記憶しなければならぬ。

而も一面に於て、國家主義經濟ブロックの強化は其後と雖も、更らに重關稅に依つて日貨排斥の手を緩めず、愈々厳しく關門の守を堅うして來たのであるが、其にもかゝらず、尙需要續出して商談の絶へざる所以は、其が爲替安に乗つてゐるにしても、兎に角、疑ひもなく商談に應じ得る程の「低物價」に依る現象たる事は拒み得ない。

故に此際物價の吊上を目的とする「平價切下げ」は、漸く芽生へ初めて來た國際貿易の利潤、實需要に導かるゝ爲めに復興する内國工業の活氣と失業者の減少、其等に依つて促進さるゝに違ひない本景氣の恢復を犠牲にしなければならない。尙ほ我國の産業採算點から見れば、金輸出再禁止後に於てさへ、一般物價の騰貴も、企業家の期待を裏切つて實現されず、唯金の輸出再禁止の影響として黄金のみが、一般の物價を誘ひ得ずに、自分のみが先走つて大飛騰を續けてゐると云ふ様な

風變りな特殊事情が、企業に従事してゐる人達の首腦部の期待した、一般物價の騰貴に反して起つたのみである。其に依つて、黄金と紙幣との間には、黑白もたゞならぬ程の溝が出来て、紙幣で買ひ得る純金一匁が拾圓となり、貳拾圓となる様な趨向で、簡単に云へば、今日の量目平價である純金一匁は、購買力平價たる金五圓でなくなつて、其二倍である金拾圓であり、其四倍である金貳拾圓たらむとする金貨幣價值は、購買力平價の二倍たり、四倍たらむとする、貨幣異變となつてゐる。故に現在の「平價を切り下げず」に金輸出の再禁止を解き、兌換を復活せしむる時には、昨日まで單なる不換紙幣五圓であつたものが、今日では金貨五圓の代辨物として、金貨五圓の實力を恢復するが故に、此同じ紙幣金五圓は、金の再解禁直前までの紙幣金拾圓と同一の購買力が與へらるゝものたる事は云ふまでもない。即ち此際即時解禁すれば、昨日まで拾圓でなければ買へなかつたものが、同じ純金一匁でも、今日から五圓紙幣と兌換されると云ふ事になると、昨日まで、拾圓してゐた純金一匁が今日では五圓になるゝ事であるから、拾圓から五圓へ急轉直下の半額へ物價が下落する勘定になると云ふ同義語だからである。

故に物價を漸次に下げて、紙幣五圓で、今日紙幣拾圓でなければ買ひ得なかつたものが、五圓で求め得らるゝ様になるのを待つて、金の再解禁をすると、純金の相場相當にまで兌換紙幣の購買力が引上げられて居るので、量目平價を其儘にして金禁輸の再解禁をしても、此で兌換紙幣購買力が

金貨幣購買力の平準に來たのであるから最早物價には何等の波及もないのであるが、其様した準備即ち漸落姿勢にも導かず、何の用意も指尊もせずして急に金禁輸の再解禁と兌換復活とを斷行すると、從來の不換五圓紙幣が兌換五圓紙幣となるので、其購買力も急に倍加して、物價は激減と云ふ急慘落に陥れらるゝ結果となるから、(1)豫め物價を低落せしめず、そして物價の急慘落を防ぐのだつたら、今日では幣價切下げに依る外には何等取るべき方策がない。

故に、金の再解禁後に於ても、現在の物價以下の低落を全國民の必要からみて欲しない場合を望む以外には、強いて平價を切下げてまで、敢て民衆の購買力を奪ひ、企業家に献ずると云ふ片手落ちなものにする必要がない。況んや現在過剩と稱せられてゐる生産物を一掃し、進むで本格的に失業者並に失業資本の就役を可能ならしむるには、更らに物價を下げて、新らしき消費階級を得る必要が急務中の急務である場合に於ておやなのである。

要するに、企業家の願ふ事業の榮華を、民衆との間に置かれたる——購買力でふ楔——に依つて生ずる妥協、企業家と消費者との結合が、企業家即供給者と消費者との對立常識との平衡的な立場に在らねばならぬものとし其「對立と妥協」とが「相互に排斥し合ふ」・「矛盾に満ちた」・「對立的なもの」即ち二個の相反する「性能」に依つて保たる、平準・平衡状態に求めらるる缺ぐ事の出來ない結果なのである。

「其様なると、農村地主や事業家の借金苦は一體如何なるんだ」

「其は其人達の責任さ！ 彼等の借金に就いては、一言の相談も民衆にはなかつたんだから」

「そんな薄情なことを云ふなよ。」

「いや！ 國家が大事だからね。眞の産業興振の上からも必要なんだ。其に私有權を守る上からも必要なんだ。」

「うむ！ 私有權の擁護を、そんな風に考へてゐるんだね！ うーむ」

「其様じゃないか？ 如何なる場合だつて、自分の利益の爲めに、不當に他人の權益の犠牲を強要するつて考へは、侵さるゝものゝ私有權が承知しないんだからさ」

「だが、國家産業の興隆と云ふ名目の爲なら仕方がないじゃないか」

「そんな場合なら別だ。だが今日の産業振興なるものは、何も企業家を無理にも救ふと云ふ事と同一じゃないぜ。」

「うーむ」

「其よりも、如何にすればより澤山商品を買つて貰へるかと云ふ問題の方が先きなんだよ」

「うーむ」

「どうだ？」

「いや！よく解つた。成程其様だ。」

「だから問題の借金苦は、自然的な産業の繁榮によつて、其利益から脱ぐなら脱ぐのでなければ穩當でない。故に舊平價で解禁を目指して低物價政策を取り舊量目平價たる純金一匁を含む購買力平價が一金五圓也に導く事が理想であつて、やがては爲替が復舊せしめて、輸入原料の爲替差損を除き、而も邦品の内外市場を擴張し、現在の生産設備を總動員せしむる手段に生きる事が本當である。貿易によつて富國強民主策を建てなければ、眞の富も、生活も得らるるものではないからである。」

「一寸解らない所が出来て来たよ。」

「どの點が不思議なんだね。」

「物價を購買力平價に等しく云々と云ふ所だよ。」

「よし、来た!!其ならなんでもないじやないか前にも云つて置いた事だから。」

現在純金の市價が騰貴した實際からみると、「兌換を停止されてゐる今日の紙幣が持つ購買力」は「五圓紙幣乃至銀銅貨が純金五分としか交換出来ぬ事」であつて、一匁の純金は拾圓紙幣一枚の價格・ねうち・があり、更らに云ひ換へるならば、純金一匁は紙幣で買へば拾圓出さなければならぬ事になつてゐるのは、誰だつて百も承知してゐる事だ。所が「五圓金貨は一匁の純金を含む」で

ゐるならば、五圓金貨は紙幣拾圓の購買力を持つてゐると云ひ得る譯で、拾圓が五圓の二倍であるから、五圓金貨中に含まれてゐる純金は一匁が現在の相場では五圓の二倍に相當する拾圓であるから「純金一匁が五圓」とする法定相場即「購買力平價」から推すと、要するに五圓金貨が鑄潰されて金塊になると拾圓になるとふ實力は、購買力平價の二倍であるから、金を解禁して兌換を復活し、「此五圓紙幣は金貨五圓・純金一匁と交換す」る約束を果す事になれば、昨日まで紙幣拾圓でなければ呉れなかつたものが、今日になると紙幣五圓で兌換さるる事即ち得らるゝ事になるから、物價は急轉直下・つるべ落しの慘落となり、財界混亂・倒産續出・終に取引中止の止むなきに至るを以て、舊平價での金解禁をするについては此急斜を出来る丈に緩和調節する爲めに、放慢政策を捨て、緊縮政策を取り、次第／＼に物價を低落に導く必要を忘れてはならない。

だが商人に取つては、五圓で仕入れて三圓で賣る事は、是うした經濟異變がないとすれば確かに損害を蒙つた取引であるが、此場合は、例令三圓で賣つても、次に五圓要した仕入が二圓五十錢で果し得るならば、漸次の物價低落は、急轉直下的に來たものゝ様な打撃は蒙らない。即ち危險分散の効果を依り、禍を轉じて福となすの類である。

斯くて國民の持てる購買力は倍加し、生産の需要圈内を自國に於て擴大する事は勿論、尙輸出を盛んにして外國市場を獲得又は擴大して生産消化を良好に導くのみならず、更らに生産を刺撃して

其次に來るものは産業資本の活動となり、勞・資の失業問題の解決を早からしむるに至るだろう。

(3) 今最近三ヶ年間の第三回半期の、七月から九月までの、貿易額を見るに

	八 年	七 年	六 年
輸 出	五二一、一三一、〇〇〇円	三八八、二一九、〇〇〇円	三一一、八七一、〇〇〇円
輸 入	四〇四、四三八、〇〇〇円	一三七、二二八、〇〇〇円	二七四、八九四、〇〇〇円
入 超	一一六、七一四、〇〇〇円	一五〇、九三〇、〇〇〇円	三六、九七七、〇〇〇円

之を重要品に見るに

綿製品	九六、六一一、〇〇〇円	八三、八四三、〇〇〇円	五九、五二九、〇〇〇円
毛織物	一六、三四八、〇〇〇	一四、六〇三、〇〇〇	一一、一九四、〇〇〇
棉 花	二、六一三、〇〇〇ピクル	一、七〇八、〇〇〇ピクル	二、〇一三、〇〇〇ピクル
生 糸	一四九、〇〇〇	一六六、〇〇〇	一九四、〇〇〇ピクル

(4) となり、僅かに生糸が昨年比して約一割の減少を見たのみで、他は何れも増加し、綿製品は一割五分毛織物一割二分、棉花は五割三分の増加で、注意すべきは輸入雑品中工業原料品たる石油、ゴム、羊毛麻、胡の輸入が激増し前記商品の本年七・八月の輸入額は五四、五一五、〇〇〇圓に達し前年同期の金額二七、二六九、〇〇〇に比して略倍額に達し内國工業の殷盛を物語つてゐる。

生活苦の落着

インフレーション
とリフレ
ン

一日の儲けに相當した負債を償ふに三日の働らきを要する事は、確かに苦痛だ。と云ふよりは、償い切れないかも知れない。農村の疲弊も、商工業の蒼白い思案顔や吐息も、等しく借金苦の表現だろうが、一日の負債を償ふに一日にて足る日を一日も早く求めむとして、企業家や借金地主の誰も彼もが、インフレーション政策は勿論次第に依つては亂暴かも知れぬが敢て平價切下げたるによる物價の騰貴」さへも待望した。其は大深傷を蒙つたものが、水を求むるのに無理がないやうに、借金苦にインフレーションを願ふ事には同情し得るが、大怪我人に水を與へた後は、苦しい喝だけは醫さるゝだろうが、間もなく水を飲む事に依つて、落命する事も請合ひである。

だから、大怪我人が水を望むだとして、老練な醫者は水を與へはしない。如何に患者が苦しむとも、名醫は「安價な同情」に引摺られはしない。

而も日本での話ではないが「アメリカは唯の一人でも、餓へる事を好まぬ」と宣言して、執拗にもインフレーション政策を諦めない。此等は眞面目にインフレーションを以て、景氣回復の鍵としてゐる證據で最後の手段として平價切下げ氣配さへも、漸次濃厚に漂しつゝあるが、結局重傷を負ふた企業が其喝を醫す爲めに、其生命の危険を早めつゝあると云つて好い。何となれば企業家が生

産・販賣・元利回収の段階を経て、初めて其事に與つた被用人達の懐を温めると云ふよりも、水を割つただけが量にしては膨れたが、肝腎の主成分が稀薄にされてゐる酒の利目の様に、割つて入れた水の割合以上に購買力の劣つた貨幣を獲得し・使用させらるゝので、國民は決して此信用乃至は流通貨幣の膨脹によつて、價值の下落した貨幣を下落したたけ、償なはれたと云ふより以上の理由を持たぬ範圍に止つただけ、多數の貨幣を得たからと云つた所では、何の利益にもならないのみならず、舊くから資産としては貨幣のみを保有してゐる以外に目星しい財産もない一般大衆が、物價が騰貴した事に依つて、誰よりも先づ自分達が第一番に舊くから持つてゐる貨幣が其購買力の一部でも損害に膨脹以前より保有してゐる貨幣の購買力の一部でも削減された丈けでも非常な損害を強いられ・其損害の代償として其次に自己の懐中に戻つて來た金錢は・數量に於てこそ前に比較にならないものであつたにしても、其貨幣を以て物を購買する時には、物價は既に騰貴して貨幣を多量に貰つた利益？を相殺してゐる様では今更に呆然たらざるを得ない。故に物價が騰貴してゐないで其丈けの貨幣を得たのであつたら、「國民は飢えなくて済むだろう」が一日に五圓儲けてゐたものが一日拾圓も得る様に、懐中が膨れは膨れたが、昨日まで五圓で手に入つたものが、今日では拾圓でも六ヶ敷しいと云ふのでは、「國民は一人でも餓へる者があつてはならない」希望を裏切つて、更らに新しい生活苦難に逢着する。而もインフレーションなるものが、重傷患者の求むる水の様

に、反つて死に致す理由は、自國の生産品が物價の騰貴に比例して、海外に於ける市場を失ふのみならず、自國內の市場も保てなくなつて、「賣れぬ品」に轉化するからである。斯くて其國の産業は、賣れぬ品の生産を続ける事が出来ないで、自から崩壊作用を始めるは必定である、そしてインフレーションの歸する所は「總ての國民が、豊年に依つて饑へなければならぬ」状態に導かれ、「海に浮むで飲料水に困しむ」に等しい懊惱を経験しなければならぬ。

何んとなれば、産業の繁榮に到る道は狭く、膨れた物價では通り難い。通質の縮少・信用の吟味嚴重・即ちリフレーションこそは、民衆の購買餘力が缺乏した事態に於ては産業繁榮を可能ならしむる唯一の道であろう。「急げば廻れ、瀬田の唐橋」は當に此際の金言である。

而も、インフレーションでふ無駄な努力が、企業家乃至は資本家に依つて、今日でも未だに根氣よく續けられてゐる。物價騰貴策は人爲の總てを盡すのかと思はるゝ程に、側の見る眼にても其熱心さは非常なものであつた。其が今日まで一勿論今日でも一寸毫の効果もなかつた原因は、繰返して云ふまでもないが、燃焼を抑壓する太陽の光線の様に、物價の騰貴を阻む人文の進歩・之を少々詳しく云へば・發明や發見に依つて生産原價の低下を招來する結果・は云はずもがな、今日の經濟規模に於ける「消費者」は、前にも云つた通りに昔の様な小さなフラスコのなかで、企業家達の御陰を蒙りながら、かしまつてゐて、其で忠實に經濟現象劇の端役を買はされ、其の脚色家であ

インフレーションの失敗の原因

り、又撮影監督である經濟學者が、其筋書の解説に詳はしい、國富の代表者であつた企業家・資本家てふ千兩役者とうなづき合ひながらの吹く笛の音につれて、快よく踊らされてゐた程に弱いものでなくなり、而も其産業の規模の點でも古今の差は實に霄壤もたゞならぬ程の相違を生じてゐる。其に大規模な産業以上に育てられた購買力は企業家・資本に代つて國富の代表者になり終せた今日は、今日まで這入つてゐた國民經濟が此フラスコを壊して自由に、到る所で、自流自儘に、各自各様に動いてゐる状態が現在の經濟事態なのである。故に、經濟學に依る舊い經驗を役立たしむるには、先づ舊昔の様に、此大規模な産業を一丸とする大フラスコに全消費能力を抱擁する事に依つて、初めて舊い經濟學の言が利くのであるから、此頃に至つて遅滞きながらも産業統制機關として、大フラスコ然たる、トラスト又はカルテルの擴大強化を企てる事に氣附いた米國は、今度こそ一時の物價吊上げには成功するであろうが、此企ても世界的企畫統制經濟にまで徹底させなければ折角龍を畫いて眼を點ぜざるの憾があり、水を山頂に導く類の努力が、此不自然な物價政策に要する事だらう。だから、其効果が期待に副ひ得る事も、相當に困難な事情が伏在してゐる。

たとへ此政策の第一階段として、一國だけのトラスト及カルテルの組織強化は成功するにしても物價騰貴の進行を容易にせしめない第一の理由は「自然性たる物價下落の大勢」第二は「社會主義思想に依つて歪められた、現在の資本並に資本家に対する不當な疾視」に基づくは兎も角として

アフレイ
ションの
勝利策

も、購買の意思が大衆にある以上資本家に對する反感が手傳ふと、此等の二大理由の合作たる大逆流の邪魔立てを易々たらしむ外國品の流入があるとしたら、インフレーションの願望が、今日から前祝ひ氣分で、企業合同を喜ばせらるゝなどは、間違ひのないところ尙早の感がないではない。其に比べるとアフレーションの政策は、重傷で水を呼び需めてゐる態な今日の資本家が黒白を明かにする暇なくして、希ふ目前の・焦眉の・切ない苦しみの即効劑でない事だけは確であるが、其は繁榮へ到るまでの、細い長い道を歩む爲のもので、何と云つても、缺ぐ事の出来ない・其が一時一寸にしても苦しみを増すだろうと云ふ怯懦な憂愁に脅やかされてゐる人達や、此異常事態によく堪へ得らるるかを慮る人達に取つては、問題でもあろうが、財界中の事業の種類や規模の大小は兎に角、健全な分子は、此小さい細長い道中に仆れると云ふ事などはない筈である。艱難汝を珠にする、試練の道に譬へ得る場合であらう。唯如何なる時でも、仕入値段よりも賣上値段の金額が少ないと云ふ理由のみでは、此取引は損害であると云ふ錯誤を改めて、何時でも、損益は貨幣の數量のみに捉はれずして、同時に其内容たる購買力を吟味して後に、取引の結果を確めるのでなければ、其損益勘定は正確だとは斷じないのが人の理想であり又實際化し得べき眞理でもある。デフレーションの蒙る不當な非難は、大概貨幣の數量・金高から見た収益の縮少を悲觀材料とせられてゐるやうであるが、其が「購買力の増加した貨幣」となつて、其點は補償されてゐる事は見逃し

てはならないのである。

云ふまでもなく、經濟國策なるものは「一人にても饑ゆる者を無からしむ」事を主眼として國富の増進を待望しての經濟政策を行はなければ、到底其有終の美は完ふせられない。斯は我國風たる國民一致の眞諦であり、方法でもあり得る。支那の言葉にすれば「吳同越舟」を指し、現代味を加ふれば「企業家主義即社會主義」と同義語たるを失はない。何となれば、武備を徹廢して平和は希へず、統制に服する事を拒むでは、個人の自由も危く、此二個の「相互に排斥し合ふ・矛盾に満ちた・相對立せる」双翼を適當に摺合せし、調和し、平衡せしむる所に、「廢滅の素因とならぬ・革命の原因ともならない」進化を期待し得るので、丁度勢よく走れば走る程、其足にも車にでも、地面やレールの抵抗力が其に比例して必要である様に、あたかも「均勢のとれた雌性と雄性との共同工作」が、決して有害になる原因でないものと同様である。

だから燈火管制にも身の所在を明かにし得る資本家・企業家の繁榮は・常に民衆の購買力を忘れない企業家のみの特權である。其でなくては、常に買つて貰ふ企業家の地位が守れる筈がない。民衆にしても、企業家を鞭撻し、文化に依存する損害のない程度に於て、其供給原價の低下に努力せしめて、勤勞に依つて得た零碎な餘力を以て、より多くの文明生活を享樂する事を望むのである。そして其事は亦物價の不當な下落を自然に阻止するに足る程の物貨消費をも忘れないだらう。

故に「資本家・企業家と被使用人」・「都會と農村」との對立も結局は「官舟を造る頭梁と其工人」に等しく、共に其の目的は「生命線の共同保全」の爲めに働いてゐるのだから、若し企業家が過去の夢だつた觀念を至上とし、主眼とする主張や政策・結局其によつて自己を亡ぼし勞働者も斃るゝ程のものだつたら、如何に其主張や要求が悲痛な要求だとしても、望みなき背水の陣に似て・自他共に危険であるから、斷じて實現せしむる性質のものでない。従つて購買大衆の疲弊困憊に拍車を掛ける「物價騰貴策」が、其様した理由で、程なく葬らるゝ事だらう。そして企業家は、取る前に先づ與へなければならぬといふ、平凡な理由に従ふ事に、生き甲斐のある「悲痛な誇」を感じる時が來ないものでもない。否、必ず其様なるものだ。そして其時こそ億兆心を一にした、國民一致の・團結の一分子として、社會主義者とにらみ合ひながらも、手は堅く握り合つてゐなければならなくなるのだ。其が有意識にしるゝ、無意識にしるゝ。

如何なる要望があるにしても、今日の經濟界は「國民の唯一人だつた饑へてはならないてふ結果が欲ましいものであつたら、物價の騰貴などは、冗談にも口にさへすべきものではないだらう。重大な疾患者の・異常態の・危篤状態に近いものが「要望」するものは、大抵の場合は最も病態を悪化せしむる原因を誘ふ事が多い。

一九一九年以來・戰雲が收つて以來の各國の經濟工作の經過は、企業家の意思の如何にかゝら

す。物價は一途に下を向いて来たではないか？そして此物價の自然的な・水平運動を阻むだり、妨げたりした努力に比例して、其丈け景氣の回復が後れてゐるのではなかつたのか。それともより以上に悪化せしめた跡のみが、目立つてゐるのではないだろうか？今日の經濟界は、(イ)物價が騰貴する(ロ)假需要を起し(ハ)諸産業が活氣附けられ(ニ)産業の擴充と共に失業者が減じ且つ一般も收入が増加して購買力を強め(ホ)財界は需要が増加する爲めに活動が盛んになる。と云ふ單純な・幼稚な・過去の思想や經驗を應用した觀念に餘りに禍を多く蒙り過ぎてゐる。吾々の考へでは、(イ)物價が騰貴する(ロ)一般の購買力が其だけ減縮するから(ハ)物の需要・必要はあつても、其を消費する事が出来ず(ニ)従つて消費者階級を縮小限定され(ホ)不自然な生産過剰に陥るのでなかつたら、(ヘ)生産制限を餘議なくされ(ト)事業は縮小して失業者が増加するのではないのだろうかを、惧れるのだ。而も物價騰貴による收入の増大は、常に購買力の増加でないことも解つてゐる。故に萬一假りに物價の騰貴に成功したとて、其は吾等の生活を明るくして呉れるものと、早合點する事も差し控へねばならない。

そして企業家も、大衆の購買實力と對立しながら・相手にしながらも、大衆と共に手を連ねて自分も大衆の一細胞として、其統制に服さなければならぬと云ふ色彩を、今日の經濟事情が、最も明瞭に・物語つてゐる事に氣附と共に、危険な舊い優越觀念や共に根差した主張や政策を、捨てね

ば、ならないのでないだろう。況んや凡ゆる物價騰貴策が失敗に終つた程に、インフレーションは時代錯誤であり、不合理な事にも氣付いて好い材料が有り過ぎる程經驗したのであるから。

生活苦の落着 (其二)

物價の低落・貨幣の購買力増加に依つてのみ國民の經濟活動の發展即ち景氣來を豫期する事が出来る。と云ふ結論を得たのであるが、幸ひ經濟事情を取巻いてゐる諸要素は、文明の進展と云ひ、其に關聯する生産機構の趨勢と云ひ、一つとして物價低落を助けられないものがないてふ、目下の諸形勢では、物價の低落を阻み、落勢を塞いでは、誰も「巨人たる事を得ない」だろうから、早晚淀みなく、物價は低落して行く事だろう。そして其は、何物の干涉にも挫折すべき性質のものでない。

「其じや企業家が立つて行けないのぢやないか？」

「否！其様ぢやない。物價が落ちても消費階級層が其丈けに殖へて行くので、需要が相當に根強くなるから、貯蓄さへ獎勵しなければ需要強化が、急激な落勢を支へて行くから、企業家は増産による利益による利益で補ひがつくのだ。」

「それではつまり、國民は皆其日暮しの、金に無頓着な生活をしなければ、景氣がよくなりも、續

きもしないと云ふんだね。」

「そうじゃないよ。金！金！金！の世の中だ。金が欲しい。金大切だ。景氣直しを望むでゐるのも、矢張り金の性だ。金が物を云ふ此世で金が欲しいのは當然だ。」

「其んなに欲しい金を何故に、惜氣もなく使ねばならないんだ。」

「其はより向上した生活を樂しむ爲めに必要なのだ、つまり使ふ爲めにも欲しいんだ。其が又景氣直しの妙法だからな」

「其で其人の生涯は、幸福なのかね？」

「生涯？先づ働ける間は幸福だよ」

「だが働けなくなつたら？」

「不幸だね」

「食へなくなつたら？」

「そりや地獄だよ勿論」

「其地獄が來ないだろうか？老ひ果てた後に」

「若し來たら？」

「一大事じゃないか。取り付く島がなくては！」

「成程ね」

「其でも預金は必要なんだろうか？」

「まあ其様なんだ。所で其には面白い話があるんだから話しても好いよ」

「其様かな！で其話と云ふのは！」

「其耳寄りの話と云ふのは、是うなんだ。」

有名な貧乏町として聞へた、ヴェルグルと云ふのが、オーストリアに在る。其が近來二年程前から完全に不景氣を追拂つて、今では素晴らしい大繁榮でホク／＼だと云ふから馬鹿にならない。

所で其景氣の原因と云ふのが「金は使へ蓄へてはならぬ」と云ふのだ。そこで此町では、どうしても金錢を費はす爲めに、一志、五志、十志の労働債券を發行して、其を使はずに一ヶ月を経過する毎に一分づ、購買價值を減ずることにしたので、其様と規則がに定ると、金錢の價值が下落せぬうちに、サツサと使へと云ふので、誰も彼もが氣前よく費ふと云ふ風に染むで仕舞つた。だから、勢ひ、文字通りに、金錢は天下の廻りものも廻りもの、而もリレー競争の旗を手渡す様に、其勢が凄まじく。

殊に月末には役場へ税金の納入者が殺到するばかり、仍で不幸にして其債券が月越になると、役場へ行つて其債券面の一分を支拂つて、日附の札を貼つて貰へば又次の一ヶ月は元通りに使へると

云ふのであるから、其損が嫌だと云ふので、税金の前納をするものも出て来ると云ふ始末だ。で兎に角是で村の財政はすっかり面目を改めて、道路でも橋梁でも、全く見違へる程に立派になつてゐる………と云ふのだ。

「成程ね。だが景氣が直つて失業の心配がなくなつたにしても。老いて働けなくなつて、蓄へがない時には、其人の生活はどうなるんだ。」

「斯う云ふ例は極端は極端だが、まあ日本なら子供に懸るのが普通なんじゃないか」

「其も皆が親孝行や、健康で働いて呉れ、ば問題じゃないんだが、子が無くつては惨めだね」

「其様だ惨めだよ。」

「其時には如何して呉れるんだ。」

「さあ！それは？」

「まだあるよ。子供が一人前になる前に、其親爺たる働き手に亡くなられたら、如何して呉れるんだ？」

「さあ！それは？」

「其町で何んとかして呉れるんかね？」

「さあ！其點だね」

だが諸君！失望してはいけない。ヴェルグル町の例は勿論極端だ。だが其裡の眞理は其爲めに價値が變るのではない。だから景氣を待望する爲めには、貯蓄は有害だ。だが生活保證が無くしては老後を養ふ事が出来ない不安が氣になる。

明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半の嵐の吹かぬものは。

人生も此様に無常だ。而も、此の無常なるが爲めに明日の日もわからぬ程なら自分ながらに心細く、だから頼なき我腕に慕ひよる、愛しき兒等に涙するかな！と云ふ悲痛な疼きを生ずるのみならず、貯へ様として貯へたとて、其れより大きな不幸が其豫金に先立つて来ないとも限らない。重盛の嘆きではないか、景氣を招かむと欲せば。貯へもならず、生活の保全も出来なくなるとは？實に景氣待望の陰には、是うした個人の生活不安が潜むてゐたのだつた。景氣だ！と嬉ぶ世間の華やかな嬌笑の裏には、景氣招來の爲めに幼い犠牲者が既に世の落伍者として怯へ切つて浮かぬ顔をして淋しく遠慮勝ちに暮してゐるのだ。そしてやがて是等の幼き子等が、「笑ふことのない」。「生くる悲しい」人生に堪へられなくなるのだ。

母子心中・千六百件、道伴れの子等千八百餘名！

虐待されてゐる小さい子等の顔！其の凝視してゐる蒼白き母姉！

噫！いちらしい！而も其子は誰の子だ。其の母は誰のだらう。

是くなるかも知れない自分の子を是くなるかも知れない自分の妻を今日から護れ！ 而も景氣を回復する爲めにも先づ誰もが共同精神に復らねばならない。

「そして弱き子等の生活を保證しろ」

だが其が個人の貯蓄ではいけない、其で「唯一人をも餓ゆる事のない社會」を望むための景氣であるなら、此不兩立は、如何にして取り去り得るのだろうか？

世界は今や此點に向つて注意しなければならない時が來たのだ。景氣が回復した時の「貨幣價值の變動は、最早、氣にする必要がなくなつたが、其爲めには誰の子が犠牲者となつて「生活權を剝がる、」のだ。誰の妻が「死を選ばなければならない」のだ。景氣裏の悲劇なくて？！

「だが其を免る、方法があつたら？」

「何？どんな分別があるんだ。」

「其には、一人の力では到底駄目だ。」

「其様だろう？成る可く宵越の金は持つな然かして、お前の家族にお前の亡き後も充分に生活を保證しろつて云のでわね」

「其様だ。だからお互ひに責任を持ち合つて、萬民が團結したら不景氣の解消するは勿論其陰に泣く是うした不幸からも、お互ひが免れ得るのだ。」

其は景氣だから・不景氣だからだと云つて此經濟的團結効果の有無を景氣ある時と否との場合を區別する意味で、此を景氣待望の要素と結びつけて云つたのではなく、唯、平素に於ての其重要さも異らないと云ふ事は勿論であるが、特に現代の時代世相と景氣の挽回策と關聯して、最も重要な役割を、此責任ある國民的・大衆的團結が、社會的にも家庭的にも持つてゐると云ふのである。

昭和八年十一月五日印刷
昭和八年十一月十日發行

〔定價金參拾錢也〕



(載轉斷無禁)

大阪市旭區今市町一〇六四番地
著者 丸 安 教 之

東京市淺草區新谷町二〇番地
發行人 館 清 一

大阪市西區北堀江二番町六番地
印刷者 田 村 市 太 郎

大阪市西區北堀江二番町六番地
印刷所 日 本 印 刷 所

電話新町三七六九番

東京市淺草區新谷町二〇番地

發行所 日本保險協同會

東京淺草區私書函第壹號
振替東京二三一九九番

三井生命保險株式會社

仁壽生命保險株式會社

住友生命保險株式會社

太平生命保險株式會社

千代田生命保險相互會社

片倉生命保險株式會社

第一徵兵保險株式會社

第一生命保險相互會社

安田生命保險株式會社

帝國生命保險株式會社

共保生命保險株式會社

有隣生命保險株式會社

大 同 生 命

堀佐土阪大 社本

呈贈書内案

リ在に險保は大增の富 リ在に勉勤はけ儲

命 生 清 回

廉低 壽確

内ノ丸

京 東

命 生 國 愛

谷比日

京 東

常 磐 生 命 保 險 株 式 會 社

昭 和 生 命 保 險 相 互 會 社

日 華 生 命 保 險 株 式 會 社

日 本 徵 兵 保 險 株 式 會 社

352
489

の 一 宅 本 日

命 生 本 日

石 磐 礎 基

命 生 德 福

橋 江 大 ・ 島 堂 ・ 阪 大

は 險 保 災 火

災 火 都 京

昭和九年版
日本保險年鑑
記事材料寄贈歡迎

絶えざる各位の御支援を得て愈々我國唯一の日本保險年鑑昭和九年版の編纂に着手しました左記諸項目の材料につき地方讀者諸君の御寄稿を歓迎します(締切十二月下旬)

(一) 總觀篇 資料として地方保險界の記録的事件の概要及び關係文書

(二) 現勢篇 資料として各地各社の經營狀態、收支計算表、各社の勢力範圍と推定成立高、外國會社の進出狀態及推定契約高、代理店別契約高、代表大口契約、最近一年間に於ける各社の記録的事件、施設、事業、地方業界の人物評等

(三) 名鑑篇 資料として保險關係従業員諸君の

氏名、現勤社名と職名、生地と生年月日、學歷、成績、主義、趣味、現住所、電話等

東京淺草郵便局私書第一號
編纂及發行
日本保險協會
振替東京二一三九番